

# 退教協だより

第 86 号

発行  
盛岡市大通 1 丁目  
1-16  
岩手教育会館内  
岩手県退職教職員  
協議会  
会長 佐藤 淳一

## 教育現場における

## 現在の課題と未来への展望



2024年、岩手県  
退職教職員協議会「結  
成50周年」誠におめで  
とうございます。

社会の課題に向き合  
い、より良い社会の実現のために地道に  
活動を継続し、一歩ずつ確実に運動に取  
り組まれてきた退教協の皆様方に敬意を  
表します。

また日頃より、多方面にわたるご支援  
に對しまして、感謝申し上げます。

近年、教員の働き方に関する問題は、  
働くことの重要性和その困難さが社会で  
理解されつつあります。また「いじめ」  
や「不登校」といった課題も、社会全体

盛岡市議会議員 中村 雅幸

で解決する必要があると認識されるよう  
なっています。

このような中、各地で子どもたちを支  
援する具体的な取り組みが増えています。  
例えば、高知市の取り組みである「こう  
ちこどもファンド」では、子どもたちが  
提案したまちづくりのアイデアを子ども  
達が審査し、認められた活動に市から20  
万円の助成金が交付されます。

また、寝屋川市ではいじめの解決方法  
として「人権問題」「教育的問題」「法的  
問題」の3つ方向から解決を図ると共に、  
いじめを受けている子どもの保護者に対  
し、調停や示談交渉にかかる費用を助成  
しています。

### 目次

● 巻頭提言	中村 雅幸 1
● そしてこれから	湊 惠幸 2
● 仲間	菊地ミツ子 3
● 福島原発事故から13年	
↳ 福島の現実を目にしてい	佐藤 淳一 3

さらに明石市の制度として、離婚によ  
る養育費の取り決めに関するサポートが  
強化されており、調停申込費用の全額補  
助や未払い時の督促・立替・回収を市が  
行う支援制度があります。

これらの取り組みは、1994年に批  
准された「児童の権利に関する条約」に  
基づき、子どもの権利を尊重した具体策  
が全国で進められていることを示してい  
ます。

一方、教員採用試験の倍率は、岩手県  
の小学校教員の場合、昨年度2.2倍、今年  
度は1.8倍と低下が続いており、社会にお  
いて「人を育てる」仕事の重要性が再認  
識されているにも関わらず、教員確保が  
喫緊の課題であることを示唆しています。  
私たちが目指すべきは、子どもが住み  
やすい社会を作ることです。これが大人  
にとっても生きやすい社会に繋がります。  
困っている人を助け合える社会は、自分



が困ったときに助けてもらえる社会でもあります。私たちの責任は、少しでも住みやすい社会を次の世代に引き継ぐことです。

退教協の皆様方の行動力は未来をより良いものへ変えていく大きな力となって

## そしてこれから

遠野地区会 湊 恵幸

日本被団協のノーベル平和賞。オスロ市民の熱気には及ばなくても、良識ある人々や世界中の津津浦々で反核平和運動に関する団体全ての成果でもある。

戦後80年、戦中を生きた歴代先輩は皆鬼籍に入り、釜石遠野地域平和運動実行委員長に就いた私は初の戦後世代となる。

集会に参加した若者約50人を前に、親族の戦死と終戦直後の困窮時代を自分なりに練った草稿で語ったが、中身の薄さはどうにも否めない。しかし血肉を付けたのは、来賓「伊藤宣夫さん」96歳(前県被団協会長)である。自らの被爆体験から反核反戦を訴える一言一言にはずっしりと心に響く重みがあった。

さて、遠野は田舎町だが、永く反核平

います。

私も「学校から社会の問題を解決する」という初心を忘れず、今後も皆様と共に取り組んでいくことをお約束いたします。引き続きご支持とご支援をよろしくお願い申し上げます。

和活動を続けてきた多くの大先輩方が居た。その中の2人(故人)に止めて紹介したい。遠野教育会館はこの地区唯一の労働・平和運動の砦として歴史を刻み続け、当然、退教互・退教協も事務局を置いている。書記局に原爆をテーマにした紙芝居舞台が2台有って自由貸出をしている。伊藤さんの体験を基に元退教互会長の「後藤正伍さん」が数年かけて絵を描き、それに舞台を揃えたものだ。読み手が感極まる程でその悲惨さに原爆は悪魔だと誰もが知る。日本の反戦・平和の運動は核の扱い等で紆余曲折があったが、終戦直後からぶれることなく遠野は1つにまとまってきたと聞く。私が郷里に戻った40年前の遠野教育会館には岩教組3人、地区労、管理人を含め6人が常勤して様々な活動拠点として連日賑わっていた。大御所が居並ぶ中に一際大柄で目立つ人がいた。もう一人の先輩「菊池春雄さん」

は予科練から特攻隊員として逝く運命だったと聞く。「郷土史家」として軽妙な語りも去ることながら、「戦争や原爆に良いも悪いも無い」と諭す人柄にも魅かれた。毎年8月6日の早朝は会館前に百人前後の人が集まる。短い挨拶の後に、隊列を組んで街中を行進するのだが、「原爆許すまじ」の合唱曲をバックにマイクを握って穏やかに市民に語りかける彼の言葉は心に染み入るものだった。時を経て戦中世代は稀有になり、会館もパートの書記一人が様々な業務を担わざるを得なくなった。しかしそれでも変わらぬ運動を継続し、広島・長崎の平和式典へ代表を毎年送り続けている。ノーベルの大樹は多くの根が張るからこそ立つ。これに花を咲かせ実を付けたいと願う。危うい世界情勢にこじつけて核禁条約にさえ目を瞑る日本を先ずは変えるために、「平和」をテーマとしてきた退教協の発足50年の節に、戦中の先輩と若い世代の間を繋ぐ私共退職者が、これから何をすべきなのか改めて襟を正して考えたい。





# 仲間

下北地区会 菊地 ミツ子

家族の事情で、かなり早期に退職した当時自分の中では退職者の会に入るのには当然のことであり、先輩の方々の土地独特のことばによる会話を心地よく聞きながら、会合があるたび出かけていくのを楽しみにしていたものだった。活動の中に入ろうか入るまいかなど微塵に考えた覚えはない。もうこの活動はいやといった卒業気分もなくむしろ新入生のようなわくわくした気持だったような気がする。

それから30年余。この活動に加わって来たから出来たかけがえのない仲間があり、感謝の気持ちでいっぱいである。この仲間がなかったら今頃自分はどんなくらしをしていただろう。

親の背中を見て同職についた子が、職場で会館で各種の催物で育てていただき、短い人生ではあったけど精一杯生きられたのも仲間があったことだったと感謝している。

今、この仲間を得られず一人悩む後輩たちがいることに、そしてそう出来ない環境に心を痛めている。

そんなみなさんの心配をする前に自分の足元を見なさいと声がとんでくる。当地区も後に続く人がいない。該当者はあっても出てこない。恩恵をいただくだけで、活動でお返ししていこうという仲間が続かない。これは当地域に限ったことではないことだろうと思うが、そんな方々に心を許し語り合う仲間、友人はいるのだろうか。楽しい退職後生活を送っておら

## 福島原発事故から13年

### 福島の実象を目にして

岩手県退職教職員協議会

会長 佐藤 淳一

2024年11月10日～11日に行われた「日退教第6回福島学習の旅」に参加しました。1日目は、地元福島で「反原発の立場から運動に携わってこられた2人の講師からお話を聞き、2日目は震災・原発事故遺構をめぐるフィールドワークを行いました。福島原発事故発災から13年8ヶ月経った今も何ら問題は解決されず、未来にもつながらる原発の負の問題について考える貴重な学びの機会とな

れるのだろうかと思いやられる。

「今年こそ戦争のない世の中に」「少しでも健康でいられるように運動に励みます」「図書館から本を借りてきて本を読む生活を続けていきたい」「畑の作物を少しでもよいものに育てたい」等々それぞれの目標や願いを語り合い会食した新年顔合わせ会は、私の今年の活動へのエネルギーとなっている。

りました。

1日目のお話から再認識させられたのは、福島原発事故の原因は「想定外の大津波」ではなく「冷却・配管装置の破壊」や「外部電源の喪失」であり、建設前からの警告や反対を無視し、利潤追求のために明らかな「人災」として引き起こされた事故だったということです。福島第1原発は標高35mの海岸段丘を25mも削って標高10mのところ建設されています。これは冷却用海水の汲み上げの容易性や資材搬入の経済性を優先したためで、大津波の歴史からも学ばず、地震・津波の警告や対策の要望も無視し続けた結果、事故が引き起こされたと言わざるを得ません。『危険なので首都圏から離れた過疎地の貧しい地域に・・・』これは電



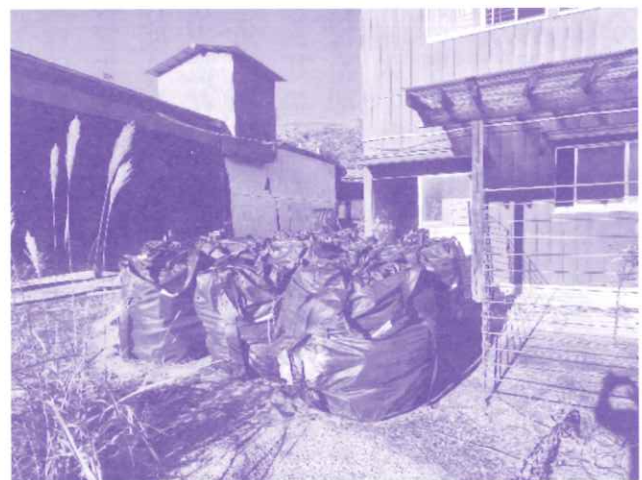


力会社のマル秘内部文書に記載された「原発の立地条件」の一部だそうですが、中央の繁栄のために地方の犠牲を前提とする差別の表れだと言えます。

2日目のフィールドワークでは、「東日本大震災原子力災害伝承館」「震災遺構 請戸小学校」「大堀相馬焼窯元集落跡」の3ヶ所を見学しました。そこで目にしたのは、ともすれば忘れかけている福島  
の被災地域の現実でした。バスの車窓からも「帰宅困難区域」の荒涼とした景色が広がっているのが見えます。事故から13年以上経ってなお、今も2万6千人も

の住民が避難生活を送っているという現実があり、戻れる見通しも持つことができません。福島の人口は、2010年には203万人だったそうですが、2024年には176万人と27万人も減少しています。そして棄民され、侵されたままの被災者の人権、さらに危険にさらされながら作業を続ける廃炉作業員や除染作業員の人権も蔑ろにされているのです。

2023年8月に、国と東電は反対の声を無視して「汚染水の海洋投棄」を始めましたが、初めから一番安易な海洋投棄ありきで進行し、他の処分法（スリーマイルで実施した蒸発法やモルタル固化など）を検討する努力はしていません。また、日本の場合「直接デブリに触れた核汚染水」で、他国の場合は「冷却水の間接汚染水」であるということも問題にされなければなりません。多くのメディアは国と東電の発表を伝えているだけで、批判精神を失っており、「安全神話」を流し続けてきた原発事故前と同じ状況だと言っても良いのではないのでしょうか。しかし、これだけの過酷な原発事故を起こしても何も変わらない日本に愕然とします。政府も電力会社も、何事もなかったかのように原発再稼働や新設に向かお



うとする信じられない状況が続いています。2011年3月11日に発令された「原子力緊急事態宣言」は以来解除されておらず、現在も発令中で、炉心で溶け落ちた880トンのデブリを取り出す見通しもまだ立っていないのです。大震災も原発事故も、いつでもどこでも起こり得ます。決して福島だけの問題ではないということを含んで確認し合い、未来のためにどのような選択をするべきか考え、行動していかねばならないと思います。